

米軍普天間飛行場の早期閉鎖・返還と県内移設に反対し、国外・県外移設を求める決議

米軍普天間飛行場は、沖縄本島中部の市街地に位置し、その周辺には住宅や学校等が密集しており、万一事故等が発生した場合は、その被害は多くの周辺住民や各種施設に及ぶことが想定され、極めて危険性が高い場所となっている。

特に、2004年8月13日に発生した沖縄国際大学構内への米軍海兵隊所属CH53D大型輸送機ヘリコプターの墜落事故は、一步間違えば大惨事を引き起こしかねないもので、「世界一危険な飛行場」の存在を改めて内外に証明した。

また、米軍基地が存在することによりレイプなど人権侵害が繰り返され、1995年米兵による小学生レイプ事件に対する島ぐるみの怒りは頂点に達している。

このため、沖縄県民は同飛行場の返還を強く要求し、これを受け日米両政府は、1996年の日米特別行動委員会（SACO）合意及び2006年の在日米軍再編協議で同飛行場の全面返還を合意したところであるが、13年経過した今なお実現を見ることはなく、その危険性は放置されたままである。

沖縄県民は、去る大戦の悲惨な教訓から基地のない平和で安全な沖縄を希求しており、SACO合意の「普天間飛行場移設条件つき返還」は新たな基地の県内移設にはかならない。沖縄県民の意思はこれまで行われた住民投票や県民大会、各種世論調査などで明確に示されており、移設先とされた名護市辺野古沿岸域は国の天然記念物で、国際保護獣のジュゴンを始めとする希少生物をはぐくむ貴重な海域であり、また新たなサンゴ群落が見つかるなど世界にも類を見ない美しい・貴重な海域であることが確認されている。沖縄県議会は、本年2月24日、「米軍普天間飛行場の早期閉鎖・返還と県内移設に反対し、国外・県外移設を求める意見書」を全会一致で採択している。

また、宜野湾市民初め沖縄県民は、最も危険な普天間飛行場を早期に全面返還し、政府の責任において跡地利用等課題解決を求めている。

さらに、地元名護市長は、辺野古の海上及び陸上への基地建設に反対している。沖縄県民の悲願は「基地のない平和な島」であることは明確である。

よって、本市議会は、政府に対し、沖縄県民の生命・財産・生活環境を守る立場から、日米両政府が普天間飛行場を早期に閉鎖・返還するとともに、県内移設を断念され、国外・県外移設を強く要請する。

上記、決議する。

平成22年3月29日

三 鷹 市 議 会